

【会長就任講演】

より豊かな言語学をめざして

定 延 利 之

京都大学

【要旨】 話しことばには、言語学、音声科学、会話研究のいずれでもカバーされていない広大な空白領域が残されている。本稿はこのことを、現代日本語の9個の現象を通して具体的に例示したものである。さらに、それらに対する筆者の同時代母語研究を通して、現在の言語学において自明視されている前提を検証した。検証対象とされたのは、伝達型コミュニケーション観（コミュニケーションを情報の伝え合いとする考え）、唯文主義（談話を文の集まりとする考え）、脱現場的言語観（言語を本質的に脱現場的なものとする考え）、切り分け型の記号観（記号を意味も音韻形式も切り分けられたものとする考え）という4つの前提である。空白領域に進んで音声や会話の研究者を呼び込む基本的なプラットフォームを構築するには、言語学者はこれらの前提が不当であり研究の障壁になっていないか、自覚的に検証し、必要があれば臆せず取り除いていくべきこと（そして実際その必要があること）を論じた。

キーワード：伝達型コミュニケーション観、唯文主義、脱現場的言語観、切り分け型の記号観、同時代母語研究

1. はじめに

筆者の主たる研究対象は現代日本語の話しことばである。筆者自身が現代日本語の母語話者であるから、同時代母語研究ということになる。

筆者が日本言語学会に入会したのは35年前、「第5世代コンピューター」が盛んに喧伝されている時代であった。日本語-英語間翻訳の自動化が国家命題とまで言われる状況の中で、現代日本語を研究しているということで、エイ・ティ・アールという研究所にリクルートされ、音声情報処理室に1年、言語情報処理室に1年出入りすることになった。そのご縁で、故・杉藤美代子先生が主宰された音声文法研究会、Nick Campbell先生の大型プロジェクト、そして谷泰先生・菅原和孝先生のコミュニケーションの自然誌研究会と、異なる分野の方々との付き合いが始まり、現在も続いている。ひとこと言えば、話しことばについて、言語学の枠を超えて考える機会をずっと頂いてきた人間ということになる。

もちろん研究分野の違いに戸惑うことも少なくない。たとえば、言語学、そして音声科学、さらに、会話分析に代表される会話研究という3つの分野をとってみても、データ観や方法論が大きく異なり、悩みは尽きないが、ここでは、筆者が最も悩んできたことを述べたい。それは、話しことばの中には、いずれの分野によってもカバーされていない巨大な空隙、隙間があるということである。不遜との誹りを

恐れつつ筆者の感覚を率直に描くと、図1のようになる。

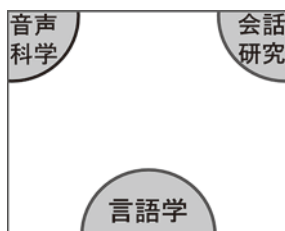


図1 話しことば研究の現状
(言語学・音声科学・会話研究のカバー領域を灰色で示す)

図1の余白部分が、扱われていない、というより扱おうとされていないために、各々の研究に色々な弊害が出ている、という感覚が筆者にはある。この空白部分について他分野の方々に話を伺ってみると、それは間違いなく言語学が扱うべきものだ、という答が返ってくる。実際、扱うとしたら、先陣を切って扱えるのは言語学、それも母語話者の直観を活かした同時代母語研究しかないのではないか——そのような思いで、おそろおそろ空白部分に足を踏み入れてみたという活動が、結局のところ筆者の研究の大半を占めている。ここではその一部を示してみたい。

2. 絶望的なフィラー「さー」

コミュニケーションとは情報の伝え合いだ、という考えは、たとえば小学校で国語科を担当される先生方が読まれる『小学校学習指導要領解説国語編』の「伝え合う力」(文部省1999・文部科学省2008)にも現れている、ごく常識的なコミュニケーション観である。しかし、本当にそうなのだろうか？

ここに挙げるのは、10代から70代以上までの日本語母語話者に対する、webページを介したアンケート調査(有償)の結果である。(以降のアンケート調査も断りが無い限り同様。)調査対象者数は146人であった¹。彼らには、見知らぬ人から「このあたりに飲料の自販機ありませんか？」と問われたという状況を提示し、それに対する返答として、さまざまな発話の自然さを5点満点で問うた(1点:とても不自然~5点:とても自然。以降の調査の評点も同様)。部分的に無回答であった2人(30代男性1人と40代女性1人)は、以下の図からは除いてある。

「えーと」の結果は図2に示すとおりである。「えーと、そこを右に曲がったところにあります」は(左の図)、1点から5点まで、話者によりさまざまな評点が付

¹母語話者の性別は男性43人、女性101人、無回答2人。年齢は、10代8人、20代29人、30代26人、40代45人、50代15人、60代9人、70代10人、無回答4人である。なお、この調査は2020年10月に実施した。

けられているが、全般的傾向を言えば（以下ではこの但書を略す）、自然である。「えーと、このあたりには無いと思いますけど」も自然である（中央の図）。「ええと、ちょっとわかりません」も自然であった（右の図）。

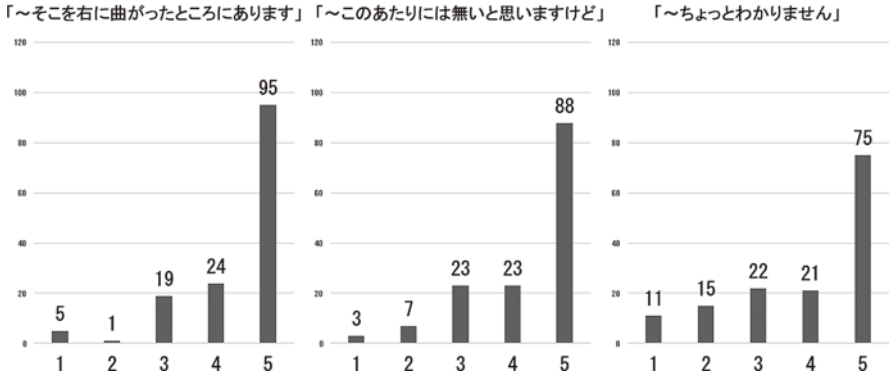


図2 「えーと」に続く発話の自然さに関するアンケート調査結果
（横軸は評点、縦軸は人数を表す（単位は人）。以下の図も同様）

当たり前ではないかと、読者は思われるかもしれない。「えーと」とは、考え中に発せられることば、フィラーである。考え終わって、相手が喜ぶ答が出てくるか、それとも喜ばないダメな答が出てくるのか、それは考え終わらないとわからない。だから、考え中に発せられる「えーと」の後は、色々な可能性があって当然、と思える。

ところで、返答が「さー」で始まった場合はどうか。図3に示すように、「さー、この辺りには無いと思いますけど」「さー、ちょっとわかりません」は自然だが（中と右の図）、「さー、そこを右に曲がったところにあります」は不自然である（左の図）。

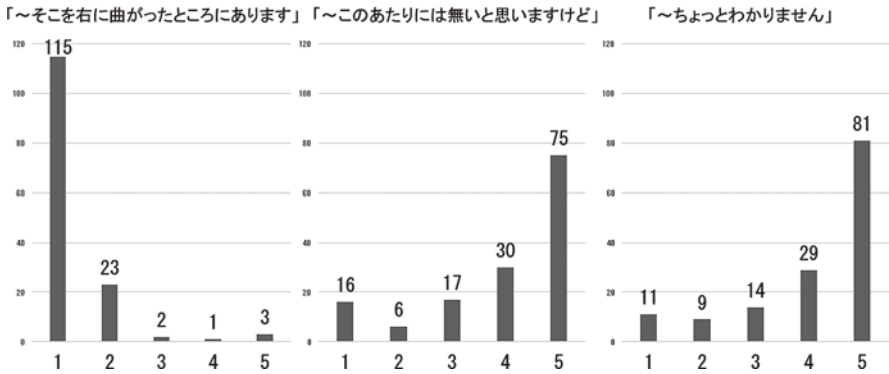


図3 「さー」に続く発話の自然さに関するアンケート調査結果

このように、「ええと」と異なり「さー」は、考えても相手が喜ばないダメな答しか出てこない場合専用の、いわば「絶望的」なフィラーである。

この調査結果は、筆者を大いにうろたえさせた。考えてもダメな答しか出てこないと分かっているなら、話し手は「さー」といって考えずに、ダメな答をすぐ言うはずではないか、というのが筆者の浅はかな理屈であった。そういう段階の筆者にとって、非常に魅力的に見え、思わずすがりつきたくなる考えがあった。これを「前触れ説」と呼ぼう。

前触れ説とは何か。「さー」は考え中のことばではないのだ。考え終わって、ダメな結果を知った話し手が聞き手に向けて、「あなたにとって残念なお知らせがあります」と伝えるような、悪い知らせの前触れのことばなのだ。悪い知らせをいきなり言うと、聞き手はショックを受けるかもしれないので、そのショックを和らげるために、前触れとして「さー」というのだ、というのが前触れ説である。いかにももっともらしく、つい受け入れたくなる考えだが、現実には、前触れ説はまったくの間違いである。そう断じる根拠を2点挙げる。

1点目は、「さー」の後ろには、考え中のことばが、なお続き得るということである。現実の会話から採った例として(1)を挙げる。(1・2行目のブラケット開始符号「[」は、これらの行が同時進行していることを示す。)

- (1) 女性:[ねーねー 植民地にねー なる国とね
 男性:[うん うん
 女性:ならない国の差ってのはどこにあると思う?
 男性:さーうーんー どこにあんにゃろねーんー

(音声 URL https://www.speech-data.jp/sadanobu_book/202410/)

この対話断片では、女性が男性に「植民地になる国とならない国の差」を問うている(1・3行目)。そして、それまで相づちを打っていた男性は(2行目)、女性の質問発話が完成した後、それに対してまず「さー」と言い、その後「うーんー」とフィラーを発し、さらに「どこにあんにゃろねー」と疑問を発し、最後に「んー」と、再びフィラーを発している(4行目)。「さー」を発した後も、話し手は考え続けている。

根拠の2点目は、ジェスチャーである。「さー」と言う話し手は、しばしば、顎を触ったり、首をかしげたりしている。これらは考え中のジェスチャーである。人はこんなジェスチャーで「あなたにとって残念なお知らせがあります」と告げはしないだろう。

以上2点の根拠は、現実のコミュニケーションを見ていればすぐ挙げられるようなものであるだけに、前触れ説の誤謬性は明らかと言える。では、前触れ説のような誤った考えを、なぜ受け入れたくなってしまおうのか。ヒントになったのが(2)に挙げる、人類学者のことばであった。

- (2) 「言語を中心に考えられたコミュニケーションのモデルは、たとえば「送り手の意図に基づく情報の伝達」といういい方に代表されるものであるが、これが身体的コミュニケーションの典型的な事例にうまくあてはまらないのである。」 (北村 1988: 42)

ここで指摘されているのは、コミュニケーションを情報の伝え合いとする考えは、言語に限ればうまくいかかもしれないが、非言語も含めて見ると大抵うまくいかないということである。そして、実は言語についてもうまくいかない場合があり、その1つが「さー」だというのが筆者の考えである。筆者の分析によれば、「さー」とは、「伝える」という構図には入らないことばである。話し手が「さー」で何を伝えるかという、何も伝えない。「さー」は伝えることばではなく、相手の前で、あからさまにダメもとで考えてみせる行動である。それが聞き手に勝手に伝わるだけである²。

筆者の「さー」分析の当否はともかく、伝達構図の危うさがここで明らかになるだろう。「さー」が、考えてもダメな答しか出てこない場合専用のことばだというのは、アンケート調査で示したように、事実である。この事実を情報伝達の枠組みにはめ込んで、「話し手は「さー」を発して、そういう事実を相手に伝えているのだ」としたのが前触れ説である。だが、上記2点の根拠を挙げて示したように、前触れ説は正しくない。ということは、おかしいのは情報伝達の枠組みだということになる。

もちろん、このような考えには、ごく常識的な見地からの反論が予想される。話し手が相手の前で、何を言い、どんな表情や仕草をしたところで、それらは結局、視聴覚信号となって、相手の目や耳に伝達されるではないか、やはり伝達ではないかという反論である。

しかしその反論は、「コミュニケーション」の意味を混同している。不幸なことだが「コミュニケーション」という用語は多義である。意味の1つは〔通信〕であり、この意味の「コミュニケーション」は「回線」や「電波」等の用語にしばしば付き添われる。もう1つの意味は〔付き合い〕の意味である。たとえば「何度も話したけど、あの人とはどうもコミュニケーションがうまくいかない」と言う場合の「コミュニケーション」がそれに当たる。人文系の研究者が取り組むべきは、まず、後者の意味の「コミュニケーション」だろうが、ともすれば第1の意味に引きずられていないだろうか。この点は人類学者・木村大治氏が「くびれた風船モデル」(図4)という形で論じられているとおりである。

² 日常語の「あからさまに」「～してみせる」と異なり、本稿で言う「あからさまに」「～してみせる」は必ずしも意図的ではないものとする。

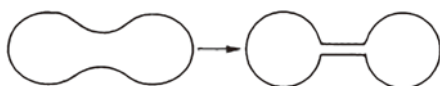


図4 くびれた風船モデル
(木村 1997: 42)

われわれが取り組むべきは、A氏とB氏の〔付き合い〕で、これは図4では風船全体として描かれている。そして、たとえばA氏のスマホとB氏のスマホの間の〔通信〕は、その風船の中央を絞ってくびれさせた、細い通路の形で描かれている。そのくびれた通路の両端では、同じコード（規則）によって、音声電気信号に変換され、また電気信号から音声に変換されて伝達される。この細い通路を出入りする規則を理解することと、風船全体を理解することは違う。考えても相手が望む答が出て来ない「絶望的」な状況だと分かっているながら話し手がフィラーを発するという現象は、風船全体を考えなければ理解できない³。

3. 「責任者」の特権的な「た」

ここでも日本語母語話者 100 人を回答者として⁴、発話の自然さを 5 点満点で問うたアンケート調査の結果を紹介する。まず回答者には、次の状況を提示した。

状況 1：皆でドライブに行こうと、3 人の人間がレンタカーに乗り込んだ。運転は、免許を持っている者が交代でおこなう予定で、まず A が運転座席に座り、残りの B と C はそれぞれ他の座席に座った。しかし出発しようとしても、なぜか車は動かない。3 人は車の中で、「ブレーキは踏んでいないよね」「故障かな」などと原因を探る。やがて 1 人が原因を探り当てた。今まで見落とされていたのが不思議だが、実は、シフトレバーがニュートラルになったままになっているのだった。

多数の回答者の判断によれば、以上の状況 1 において、原因を探り当てたのが、運転座席に座っている A であった場合、「あ、ニュートラルだ」だけでなく、「あ、ニュートラルだった」と「た」をつけた発話も自然である。両発話の評点を図 5 に

³ 念のために言えば、この現象は、「さー」という 1 つの特殊なフィラーに限って観察されるというわけではない。「絶望的」な場合専用のフィラーではないが、相手が望む答が出てこない「絶望的」な状況で、話し手が「さー」以外のフィラーを発することも十分あるからである。「なにしろ、入院してる病人が相手だから、運動器具のプレゼントっていっても、んー、ないねえ」などの「んー」がその例にあたる。ここでは、話し手はまず「なにしろ～だから」という、もっともな理由を述べる際の構文を発しており、続いて「～っていても」という、無茶な課題に言及する構文を発している。このことからわかるのは、話し手は「適当なプレゼントは無い」と考えている、ということである。それにもかかわらず、話し手が「んー」とフィラーを発することは不自然ではない。

⁴ 回答者 100 人の性別は男性 47 人、女性 51 人、無回答 2 人。年齢は、10 代 0 人、20 代 15 人、30 代 15 人、40 代 17 人、50 代 18 人、60 代 18 人、70 代 14 人、無回答 3 人である。なお、この調査は 2023 年 8 月に実施した。

示す。左図が「あ、ニュートラルだ」、右図が「あ、ニュートラルだった」の評点である。(部分的に無回答であった20代・40代・50代男性各1人と60代女性1人の計4人は、図では抜いてある。以下も同様。)

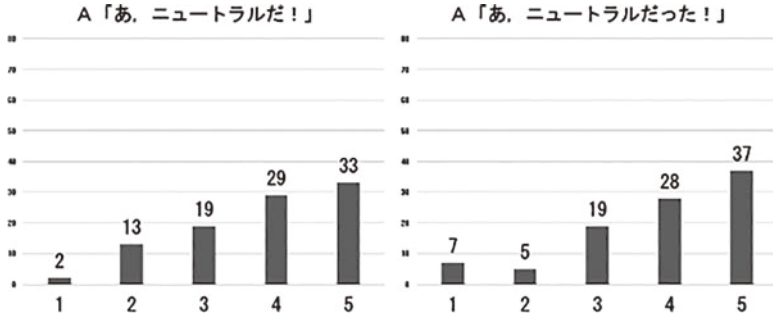


図5 状況1において原因を探り当てたAの発話の自然さに関するアンケート調査結果

ところが、原因を探り当てたのが後部座席のCであった場合は、「あ、ニュートラルだ！」は自然だが(図6左)、「あ、ニュートラルだった」は不自然である(図6右)。「あ、ニュートラルだった」という発話どうしを比べると、Aの発話の自然さ(図5右)とCの発話の自然さ(図6右)の間には、統計的に有意な差がある($p < 0.01$)。

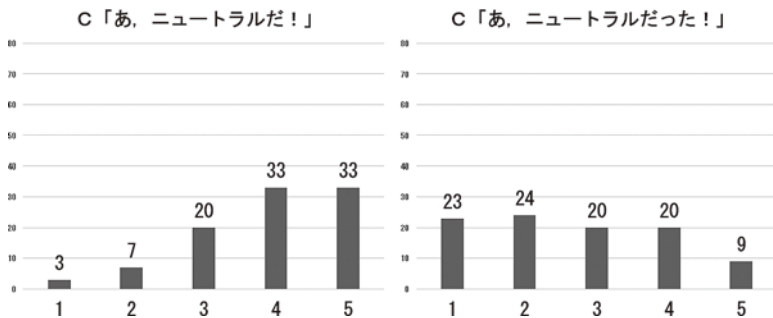


図6 状況1において原因を探り当てたCの発話の自然さに関するアンケート調査結果

さらに回答者には、上述の状況に続く、次の状況(状況2)を提示した。

状況2：いざ出発しようとする、後部座席のBが「Dを待とう」と言い出した。「Dは今日は仕事があるのでは？」とAやCが言っても、Bはなおも強硬に「Dは今日は仕事はない、だから絶対来る。待とう」と言い張った。そこでAとCも納得し、皆でDを待つことにした。と、車の床に紙が落ちており、拾い上げてみると、何とそれはDの勤務表で、今日は仕

事が入っている。

この状況では、勤務表を見たAの発話「あ、Dさん仕事だ」は自然だが（図7左）、「あ、Dさん仕事だった」は不自然であった（図7右）。先の状況1と異なり、Aはもはや「た」を発する「権利」がない。むしろこの状況では、「た」を発する権利を持っているのはBである。勤務表を見たBの発話「あ、Dさん仕事だ」は自然だが（図8左）、「あ、Dさん仕事だった」も自然である（図8右）。2人の「～た」発話の自然さには統計的に有意な差がある（ $p < 0.01$ ）。

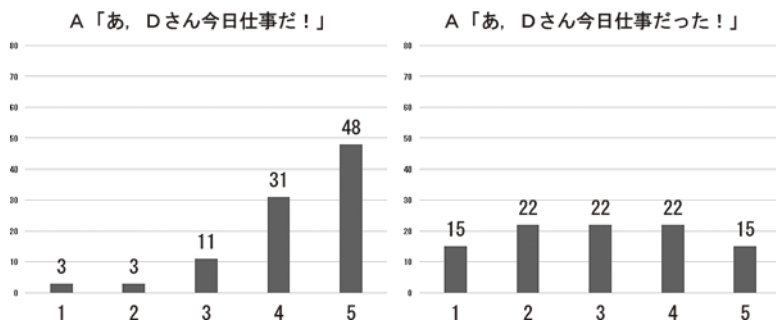


図7 状況2において原因を探り当てたAの発話の自然さに関するアンケート調査結果

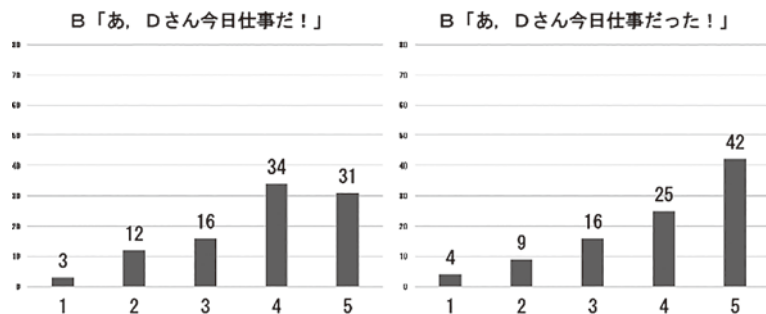


図8 状況2において原因を探り当てたBの発話の自然さに関するアンケート調査結果

このように「た」発話の自然さは話し手の立場と関わる。状況1の場合、「ニュートラルだ」という発話は、「ギアがニュートラルである」ことを発見してさえいれば、誰が発しても自然である。他方、「た」付きの発話「ニュートラルだった」を発して自然なのは、運転座席に座っているA、つまり「車はなぜ動かないか？」という問題を自分の問題として引き受け、これに何とか答を出そうとする「責任者」だけである。状況が変われば立場も変わる。状況2では、「Dは来るのか？」という問題に強くコミットしたBが「責任者」として振る舞いやすい。

「た」に関する以上の観察をまとめると、次の(3)のようになる。(便宜上、状

況1に即した形で述べる。)

- (3) a. 「た」無しの発話「ニュートラルだ」は、その情報を持っていさえすれば(つまりギアがニュートラルであることを発見しさえすれば)誰でも自由にできる。
 b. 「た」発話「ニュートラルだった」は、その情報を持っている者のうち「責任者」にしかできない。

では、これを「発話とは情報の伝達だ」という伝達構図にはめ込むとどうなるか。次の(4)を得る。

- (4) a. 情報[ギアがニュートラルである]の伝達は、その情報を持っていさえすれば(つまりギアがニュートラルであることを発見しさえすれば)誰でも自由にできる。
 b. 情報[ギアがニュートラルであることに自分は今まで気づかなかつた⁵]の伝達は、その情報を持っている者のうち「責任者」にしかできない。

しかし、車が動かない原因を皆で探しているという状況では、2つの情報伝達(4a)(4b)は、お互いがお互いを意味してしまう。車が動かない原因を探していて、「ギアがニュートラルだ」と言えば、それは今まで気づかなかつた、今気づいたということが聞き手には分かる。また、「ギアがニュートラルだということに、自分は今まで気づかなかつた」と言えば、「ギアはニュートラルだ」ということもやはり聞き手に分かる。その2つの情報伝達の一方が誰でも自由にでき、他方は一部の者(「責任者」)にしかできないというのは、おかしいことではないか。

問題の「た」発話とは、これまで心内にぼんやりとであれ、抱き保持していた古い知識(たとえば[車が動かない原因は不明])を、より新しい知識([車が動かない原因はギアがニュートラルということ])に、あからさまに更新してみせる行動だ、というのが筆者の分析である。古い知識をより新しい知識に心内で更新することは、誰でも随時できる。「た」を発して、それをあからさまにやってみせることは、それとはまた別物である。

だが、ここで重要なのは、筆者の分析の当否ではなく、(4)のおかしさである。上述(3)は、アンケート調査の結果をそのまま述べた記述である。問題は、(3)からおかしな(4)を生み出した伝達構図ということになる。このように、ある種の「た」(知識更新の「た」、定延2016)の発話は、コミュニケーションの場に発生している問題の「責任者」だけの特権的な振る舞いであり、この特権性は、「伝達」型のコミュニケーション観ではうまく説明できない。

⁵ここでは問題の「た」を、ギアがニュートラルに気づいていなかったそれまでの時点つまり過去を表すものと解釈している。

4. 人物評とキャラ (kyara)

次の(5)は、特定の文献から引用したものではない。筆者がこれまでに見聞きしてきた、さまざまな文献や発表あるいは談話の中に現れた考えを、筆者がまとめたものである。

- (5) コミュニケーションでは、話し手は、状況に応じて最適なスタイルを選び、そのスタイルに合わせて、話す速度や、鼻音化度など、声の調子をコントロールする。

うっとりするような「耳に心地よい調べ」だが、現実はずし(5)のとおりではない。しかし現実の例をここに持ち出すことは法的・倫理的にとってもできないので、代わりに小説から例を挙げたい。もちろん、小説の筋は作家の思うがままであって根拠にはならない。しかし、小説の特定の描写を、我々読者が特にいぶかしみもせず了解して読み進んでいけるということは、その描写が何らかの形で我々にとって自然な感覚に根ざしていることの現れであろう。次の(6)を見て、現実の類例に各自思い当たって頂くことは、難しいことではないのではないかと。

- (6) a. 平素の奥畑はいやにゆっくりゆっくりと物を云う男で、そこに何か、大家の坊々としての鷹揚さを銜う様子が見えて不愉快なのであるが、今日は興奮しているらしく、いつもよりも急き込んだ口調で云うのであった。
b. と、そこへ悦子が帰って来たので、まあ、娘ちゃん、よろしゅうございましたなあと、——平素から口数の多い、表情たっぷりな物云いをする男なので、——わざと鼻を詰まらせたような作り声を出して云った。

(谷崎潤一郎『細雪』中巻, 1947)

これは「細雪」の一節で、洪水見舞いにやって来た2人の男性が、出迎えた蒔岡幸子の目から描写されている。ひとことでは、(a)の奥畑という人間は「不愉快」に思われ嫌われている。なぜ嫌われているのか。話速が遅いからである。話速が遅いと、大家の御曹司のようである。しかし奥畑は実際のところ、没落しかけとはいえ大家の御曹司で、そのことは蒔岡幸子も知っている。ではなぜ「不愉快」なのか。その話し方をわざとやっているからである。わざとゆっくり喋って、余裕のあるところを見せて、大家の御曹司であることをひけらかしている。「お前は社会的には大家の御曹司かもしれないが、人間的にはそうではない。偽物の御曹司でしかない」と奥畑に面と向かって言うことはとてもできないのでイライラして「不愉快」なのだろう。奥畑は、話す速度をコントロールして自分の人物像『余裕のある御曹司』を表し、結果として不愉快に思われ嫌われていることになる。

次に(b)は、庄吉という元奉公人の例で、かつての奉公先の一家が洪水に見舞われたと知り、1番に見舞いに駆けつけ、皆が無事だと分かって、安堵のあまり泣きそうになる。それで声が鼻声になるが、蒔岡幸子には馬鹿にされている。なぜかという、忠義者を気取って、その鼻声をわざとやっているからである。庄吉は鼻

音化度をコントロールして、自分の人物像『忠義者』を表し、馬鹿にされていることになる。

この2人の男性のような事例は、我々の現実世界にいくらかもあるだろう。このような現実と言語学がどれほど対応できているか、先に挙げた(5)のような考えが言語学でどれほど疑問視されているかを考えてほしい。

人間とは社会的な生き物で、群れて生活し、互いを評価し合って、高い評価に舞い上がったり、低い評価に落ち込んだりして日々を過ごす。その評価は、意図となじむ評価と、なじまない評価に二分することができる。

たとえば「あの人は歌がうまい」という技能評は意図と馴染む。実は当人は「あの人は歌がうまい」と評価してもらおうと意図していた(カラオケ教室に行くなどしていた)と判明しても、実際に歌がうまい以上、この技能評は傷つかない。作品評も基本的に同様で⁶、「この料理はうまい」という評価は、当人がそう評価してもらおうと意図していた(3日前からことさらに仕込みをやっていた)と判明しても傷つかない。

ところが人物評は、この点において大きく異なる。たとえば「あの人は豪快だ」という人物評は、実は当人が、そう評価してもらおうと意図していたと判明すれば崩壊する。人物評という、我々が日頃、最も気にしてやまない評価は、「あの雲は形が面白い」のような自然物評とほぼ同じで、意図とはなじまない。2人の男性の不幸の原因はここにある。

話し手の人物像は、日本語では、時にはひとことで醸し出され、察知されることもある(金水 2003・定延 2020)。たとえば、接続詞「しかも」に助詞「よ」を上昇調で付けて「しかもよ↑」と言えば、『女』⁷の物言いになる。「だ」を入れて「しかもだよ↑」と言うのは、『男』の言い方である。「しかもよお」とは『下品な男』の言い方である。「しかも、おー」は、『権威ある者』のフォーマルな場での話し方である。

では、こういう言い方をする話し手は、意図的に、自身の人物像を現し伝えているのだろうか。たとえば「しかもよお」と言う話し手が、わざわざ「自分は『下品な男』だ」と示そうとしているということは(もちろんあり得るが)あまりないだろう。また、権威者にとって、「自分は『権威ある者』だ」ということは、最も話したくないことであろう。

この第4節で述べていることは(他の節にも増して)、「当たり前」の日常感覚に過ぎない。問題は、言語学がその「当たり前」にどれだけ対応できているか、ということである。神経心理学の分野では、意図的でない発話というのは、バイアルジェー・ジャクソンの原理(Principle of Baillarger-Jackson, 意図的でない発話は失語

⁶ 但し作り手の人間性も鑑賞対象に入ってくると、作品評は人物評に近づく(定延 2020: 98-103)。

⁷ ここでの『女』とは生物学的な女ではない。場面ごとに、非意図的に変わり得る「キャラ」(kyara)としての女性であり、二重カギ括弧でくくっているのはその意味である。他も同様。

症に対して頑健で最後まで失われにくい，山鳥 1985) という形で以前からよく知られている。しかし言語学では，発話の分析は発話意図の認定から出発することが圧倒的に多い。本当にそれでいいのだろうか？

意図的でない発話（あるいは発話の中の意図的でない部分）は，疑いようもなく我々の日常の中にある。それは我々の人物像に直結しており，日常のコミュニケーション（[付き合い]）において，極めて切実な部分を占める。「話し手は最適なスタイルでメッセージを伝えて目的を達成する」という，私たちがよく馴染んだ意図的な発話の構図とは違った，別の発話の構図が必要ではないだろうか。

5. 自立性のない接ぎ穂発話

コミュニケーションは意図的な伝え合いではないということを示す現象を見てきたが，今度はコミュニケーションから発話に話を移してみたい。まず取り上げるのは「自立性のない接ぎ穂発話」である。ここで言う「接ぎ穂」とは接ぎ木の用語で，台木に差し込まれる木のことを言う（図9）。



図9 接ぎ木における台木と接ぎ穂
(Sadanobu 2021: 153 改変あり)

この接ぎ穂を比喩的に用いた「接ぎ穂発話」とは，発話の冒頭部に自立性がなく，それだけに先行文脈への依存が際立っている発話を指す (Sadanobu 2021)。たとえばある大学生どうしの対話において，男子学生は，画面に映っていない女子学生からの質問（教務掛に行って「409号室の鍵を貸してほしい」と言えば，鍵を貸してもらえて409号室内のビデオを問題なく観ることができるのか，というもの）に対して，視線をそらし眉をひそめて空気をすすった上で，「と思うけどな」と応じているが（図10下線部），この発話の冒頭にある「と」には自立性がなく，それだけに先行文脈（いまの場合は相手の質問発話）への依存が際立っている。このような発話が「接ぎ穂発話」である。

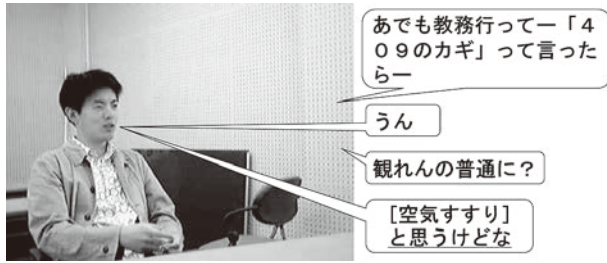


図10 接ぎ穂発話の例（該当箇所の下線を付す）
（ビデオ URL https://www.speech-data.jp/sadanobu_book/202410/）

男子学生の接ぎ穂発話には、「と」の直後に「思う」という自立語（動詞）が現れているが、接ぎ穂発話の中には、発話末尾まで自立語がないものもある。それが「自立性のない接ぎ穂発話」である。例として、ある女性が飼っているウロコインコの珍事を披露する会話を取り上げよう⁸。女性は、そのウロコインコを会話に導入する際、大きさについて、セキセイインコよりも「一回り大きい」と述べたところ、会話相手（友人）から、「二回り大きい」に訂正したらどうかという、発言修正の提案を受けた。それに対して女性は、小首をかしげて「かなあ」と言い、再考のそぶりを僅かに示してやり過ごし、すぐさま珍事の話を開きさせている（図11 下線部）。この「かなあ」発話は「か」も「なあ」も助詞で自立性がなく、自立性のない接ぎ穂発話にあたる。



図11 自立性のない接ぎ穂発話の例（該当箇所の下線を付す）
（ビデオ URL https://www.speech-data.jp/sadanobu_book/202410/）

自律性のない接ぎ穂発話は、文字通り自立性がなく、我々が考えてきた文法では救いようがないほど「壊れて」いる。それだけでなく、終助詞や上昇イントネーションによって、会話相手に向けた「きもち」（態度）が示されると、それだけ自然に

⁸ このデータは筆者が2010年度から収録・公開している「わたしのちょっと面白い話コーパス」（<https://www.speech-data.jp/chotto/history.html>, Sadanobu 2018, 定延編 2018）から切り取ったものである。

なるという、今まで考えられていなかった原理によって自然さが変わる。たとえば、「あの人が話長くないですか?」と言われて返す発話の自然さを、日本語母語話者 104 人を対象としてアンケート調査すると⁹、「だ」発話よりも上昇調の「だな」「だね」が自然である ($p < 0.01$) (図 12)¹⁰。

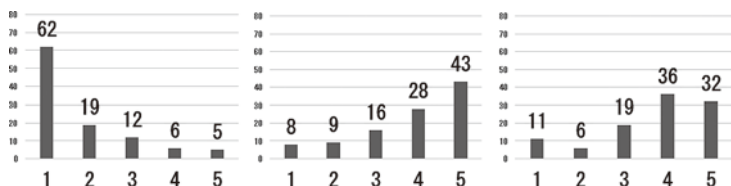


図 12 「だ」発話 (左)・「だな」(上昇調) 発話 (中)・「だね」(上昇調) 発話 (右) の自然さに関するアンケート調査の結果

自立性のない接ぎ穂発話を文の発話として認めることは、この発話が構造の点でも、自然さを司る原理の点でも、いわゆる文発話と大きく異なっている以上、問題を引き起こす。むしろ、こうした異なりをストレートに受け止め、現象を整理し、先に進むには、自立性のない接ぎ穂発話を文発話ではないと考えるべきではないか。改めるべきは文の定義ではなく、「談話は文から (のみ) できている」という、世界じゅうで受け入れられている教義 (筆者はこれを「唯文主義」“sententialism”と呼んでいる) ではないか。

6. 跳躍的上昇プラス下降調の「よお」

ここで「跳躍的上昇」というのは、一気にスラスラと発話せず、文節 (橋本 1934) あるいは連文節を単位として、こま切れに非流暢に発話する際に、文節末尾にしばしば現れるイントネーションを指す。このイントネーションには下降調が続くことが多く、それを「跳躍的上昇プラス下降調」と呼んでいる。

「跳躍的上昇」と言っても、一般の上昇調と区別するのは、その上昇が急激で、母語話者の耳には不連続に聞こえるからである。跳躍的上昇プラス下降調を一般的なならかな上昇下降調に変えると不自然になる。

ここで、助詞「よ」に注目してみよう。助詞「よ」には歴史的に 2 つのルーツがあり (間投助詞・感動詞)、これら 2 種類の「よ」は、このイントネーションで発せられて「よお」になると、2 点において違いを見せる。第 1 点は、話し手の人物像 (発話キャラ) である。1 つの「よお」は、『下品な男』の発するものであり、

⁹ 回答者の性別は、男性 38 人、女性 63 人、無回答 3 人、年齢は、10 代 7 人、20 代 25 人、30 代 17 人、40 代 33 人、50 代 8 人、60 代 6 人、70 代 8 人である。なお、この調査は 2021 年 1 月に実施した。

¹⁰ 但し例外的に、上昇調の「かね」、上昇調の「ですな」の自然さ評価は低い。これは「雨かね」「雨ですな」のように、文末で「かね」「ですな」と言う、いかにも古めかしい話し手の発話キャラが、自立性のない接ぎ穂発話という、それなりに若々しい物言いと合わないからではないか。

もう1つの「よお」は、『子供』を典型とする若いキャラの発するものである。第2点は出現位置で、両者は相補分布を示す。『下品な男』の「よお」は、文中の文節の末尾にのみ現れ、文末の文節の末尾（つまり文末）には現れない。逆に、『子供』の「よお」は、文末にのみ現れ、文中の文節の末尾には現れない。

このことはアンケート調査で確かめることができる。日本語母語話者110人を回答者として行ったアンケート調査を示す¹¹。回答者たちは、①～⑦の文字列を呈示された上で、それらの文字列が『下品な男』の発話を書き起こしたのか、『子供』の発話を書き起こしたのか、二者択一で判断するよう求められた。結果は表1のとおりである。なお表1では、回答が一部なかった6人（30代女性1人、40代男性1人、60代男性3人、70代以上の女性1人）を除いて、回答者数を104人で揃えてあることに注意されたい。

表1 「～よお」発話の発話キャラに関するアンケート調査結果(単位:人)

発話	発話キャラ	『下品な男』	『子供』	計
① イヤだよお		2	102	104
② イヤなよお		67	37	104
③ 開けたままだよお		8	96	104
④ 開けたままよお		83	21	104
⑤ 先に行ってるからよお		101	3	104
⑥ 松本さんよお		104	0	104
⑦ あのよお		104	0	104

多数派の回答によると、発話①「イヤだよお」という、文と考えられるもの（いわゆる形容動詞の終止形「イヤだ」）に「よお」が付いた発話は『子供』の発話である。他方、発話②「イヤなよお」という、文とは考えられないもの（形容動詞の連体形「イヤな」）に「よお」が付いた発話は、「イヤなよお、奴がよお、…」などと言う『下品な男』の発話である。似たことは発話③④にも言える。「開けたまま」は名詞述語文の他には考えにくく、発話③の回答は『子供』に偏る。その一方で、「開けたまま」は文中の副詞句として考えやすく、発話④の回答は『下品な男』に偏る。

そして、同じアンケート調査で問うた、発話⑤「先に行ってるからよお」、発話⑥「松本さんよお」、発話⑦「あのよお」の結果は、すべて『下品な男』に偏っている。これは、「先に行ってるから」「松本さん」「あの」が文発話ではない（各々、従属節発話、名詞発話、感動詞発話である）ことの現れではないか。「談話は文の集まり」ではなく、談話の中には文発話でない発話もさまざまあるのではないか。

¹¹ 回答者110人の内訳は、男性56人、女性53人、無回答1人。10代が1人、20代が20人、30代が17人、40代が17人、50代が22人、60代が16人、70代以上が17人である。なお、この調査は2024年9月に実施された。

7. 下降調の名詞発話

次は言語の現場性に関わる現象である。たとえば平板型アクセントの語「松本」を様々な状況で発する場合を考えてみよう。列車が松本駅に到着し、車掌が車内アナウンスで駅名「松本」を告げる(状況1)、地図を広げて松本駅を探し、駅名「松本」を一人つぶやく(状況2)、海難事故で亡くなった松本氏を悼み、海に向かって「松本」と叫ぶ(状況3)、森ではぐれた松本氏を探し、「松本」と呼びかける(状況4)、これらの状況下で「松本」を(自然下降ではなく)下降調で「まつもお」と発話すると、総じて不自然であり、平坦調「まつもー」の方が自然と判断されやすい(表2, いずれも $p < 0.01$)。

表2 状況1～4における名詞発話「松本」(平坦調・下降調)の
平均値(左)と中央値(右)

イントネーション	状況	状況1	状況2	状況3	状況4
平坦調		4.24/5	4.06/4	3.97/4	3.87/4
下降調		1.72/1	2.32/2	2.11/2	2.05/2

その一方で、向こうを向いている友人の松本氏に「松本」と呼びかける(状況5)、友人である松本氏の献身ぶりに感動し、氏の目を見ながら「松本」と呼びかける(状況6)、友人である松本氏の部屋のドアをノックしながら呼びかける「松本」(状況7)、こういう状況では、下降調の「まつもお」は総じて自然で、平坦調「まつもー」よりも自然と判断されやすい(表3, いずれも $p < 0.01$)

表3 状況5～7における名詞発話「松本」(平坦調・下降調)
の平均値(左)と中央値(右)

イントネーション	状況	状況5	状況6	状況7
平坦調		3.10/3	1.69/1	2.92/3
下降調		3.66/4	3.92/4	4.03/4

この結果によれば、名詞発話の下降調が自然なのは、いま、この発話現場にいる(に違いない)相手に対する呼びかけに限られる。イントネーションの自然さが、発話現場の相手に対する呼びかけか否かで変わる。

人間の言語は、今、現実にその場にはないものでも自由に語れる、脱現場的なもの(displaced)と言われる(Hockett 1960: 90)。もちろん、直示的あるいは指標的な語彙がその例外になることは広く知られているが、これは語数が限られ、語彙全体の1%にも満たない。脱現場性は言語の重要な面である。だが、いま見たことからすると、言語には脱現場性だけでなく、現場性も、(これまで知られている以上に)認めるべきではないか。

8. エゴフォリシティの減衰、アニマシー・他動性・敬意の退色

より文法的な部分でも、言語の現場性は観察できる。その一つがエゴフォリシ

テイ (egophoricity, 自己らしさ) の減衰である。前提から紹介すると、たとえば自己の心情を表す「私は故郷を恋しく思います」が自然である一方、他者の心情を表す「彼は故郷を恋しく思います」が不自然（「思ってます」などなら自然）であるように、日本語は自己の心情と他者の心情を別扱いして表す。これは現在の心情だけではなく、過去の心情についても当てはまる。「結婚するまでは、私も故郷を恋しく思いました」は自然で、「結婚するまでは、彼も故郷を恋しく思いました」は不自然である。しかし、心情ではなく思考・信念については事情が異なる。現在の「私はカエルは両生類だと思います」は自然、「彼はカエルは両生類だと思います」は不自然だが、過去ではこの違いはない。「中学生になるまでは、私はカエルは爬虫類だと思いました」は、「中学生になるまでは、彼はカエルは爬虫類だと思いました」と同様に不自然である（図 13）¹²。過去の話であれば、自分の思考・信念は、他者の思考・信念と同じように扱われる。言語で語られる自己とは、「感じる自己」であれ「考え信じる自己」であれ、現在の話の中ではいかにも自己らしいが、過去の話になると、ちょうど両手で拍手した音が、1秒も経たないうちに減衰して消えるように、「考え信じる自己」は減衰して自己らしくなくなり、それを反映して「～思いました」は「～思います」よりも自然さが低い ($p < 0.01$)。「考え信じる自己」の自己らしさは、発話現場（現在）の話か、その他（過去）の話かで異なり、それに応じて述部の形態（「思いました」か「思っていました」か）も異なる。

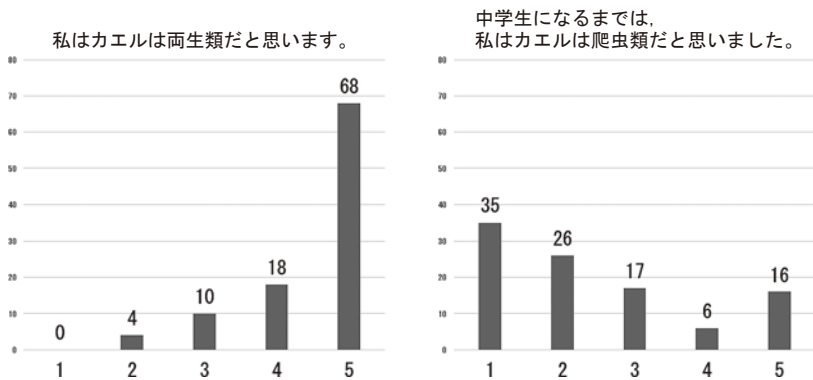


図 13 現在と過去の自己の思考・信念表現の自然さに関するアンケート調査の結果
(現在が左図, 過去が右図)

エゴフォリシティが減衰するように、アニメシー・他動性・敬意も、語りの対象が発話現場の中心（いま・ここ・現実・私）から離れれば、イメージが薄れて色あせ、

¹² 2021年4月に実施したアンケート調査による。回答者は日本語母語話者113人であり、性別は、男性36人、女性74人、無回答3人。年齢は、10代3人、20代21人、30代31人、40代31人、50代13人、60代7人、70代以上4人、無回答3人である。但し30代女性1名は部分的に無回答であったので図からは除いてある。

退色する。たとえば、否定される話の中では、モノのアニメシーは肯定される場合と比べて低い。「今朝、山沿いの国道で落石事故があり、巻き込まれたけが人があった」はあまり自然ではない（けが人の高アニメシーが「ある」と合わない）が、これを否定して「～巻き込まれたけが人はなかった」とすると、けが人のアニメシーが下がるので自然さは高くなる（図 14）（ $p < 0.01$ ）¹³。

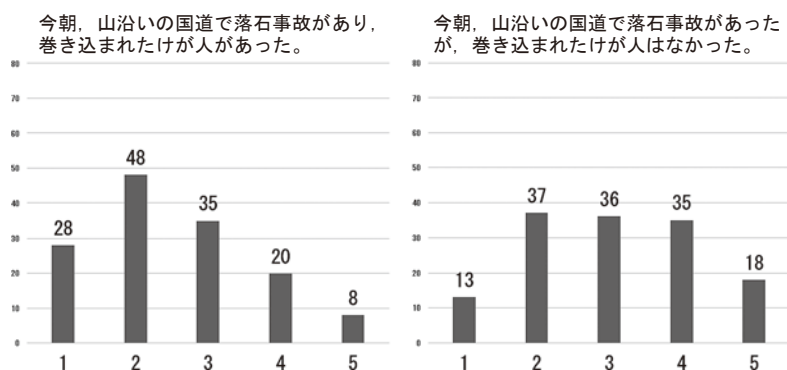


図 14 肯定と否定の、アニメシー表現の自然さに関するアンケート調査の結果（肯定が左図、否定が右図）

「いま話をしている話し手（1人称）や、話を聞いているに違いない聞き手（2人称）として表現される方が、話の中の人物（3人称）として表現される場合よりもアニメシーが高い」という言語類型論的な知見（例：DeLancey 1981）も、アニメシーは話が発話現場から離れると退色することを示している。

同じことが、デキゴトの他動性についても言える。「酒が飲む」が不自然で「酒が飲める」が自然であるように、話が発話現場から離れると他動性が低くなり、対象（酒）の対格表示が義務的でなくなる。これは「現実モード（realis）で表現される方が非現実モード（irrealis）で表現されるよりも他動性が高い」「肯定文で表現される方が否定文で表現されるよりも他動性が高い」という言語類型論的な知見（例：Hopper and Thompson 1980）に沿った、他動性の退色現象である。

同じことは、さらに敬意についても言える。たとえば「あいつはロビーにいる／いない」は、肯定と否定で自然さに差がないが（ $p = 0.950$ ）、「あの方はロビーにいらっしゃる／いらっしゃらない」は（ともに自然ではあるが）、肯定と比べると否定は自然さが低い（図 15）（ $p < 0.01$ ）¹⁴。否定される話では、登場人物に対する敬意は色あせ退色する。

¹³ 2021年5月～6月に実施したアンケート調査による。回答者は日本語母語話者100人で、性別は男性51人、女性49人。年齢は、10代4人、20代36人、30代24人、40代17人、50代3人、60代14人、70代以上2人である。但し10代・30代・40代の男性各1人は部分的に無回答であったので、これら3人の回答は図からは除いてある。

¹⁴ 注13に記した調査による。部分的に無回答の回答者はいなかった。

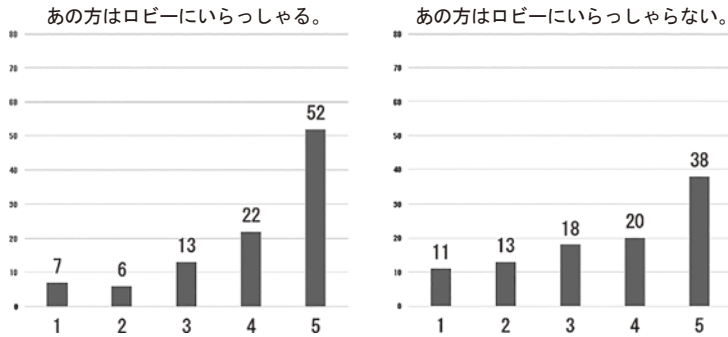


図 15 肯定と否定の、敬意表現の自然さに関するアンケート調査の結果
(肯定が左図、否定が右図)

9. 声に出して言えない日本語

現場性は、話しことばと書きことばの違いを際立たせることもある。筆者が「声に出して言えない日本語」と仮称するものを紹介しよう¹⁵。これは、ある種の日本語が、書きことばでは自然だが、現実の発話としては不自然という現象を指したものである (Sadanobu 2013, 定延 2014)。例として次の発話ペア (7) (8) を挙げる。

- (7) a. 5時にこの店で会おうって、彼と約束したんです。
b. 5時にこの店で会おう。そう彼と約束したんです。
- (8) a. いつも笑顔でいてくれてというのが彼の注文でした。
b. いつも笑顔でいてくれ。それが彼の注文でした。

これらについて、日本語母語話者 100 名に、小説や劇などの発話としての自然さと、現実の日常会話での自然さを 5 点満点で問うたところ¹⁶、図 16・図 17 に示す結果が得られた。

¹⁵ もちろんこの仮称は齋藤 (2001) の書名をもじったものである。

¹⁶ 注 4 に記した調査による。但し、40 代男性、60 代女性、70 代以上の男性各 1 人ずつが部分的に無回答であったので、図はこれら 3 名を除いて 97 人で揃えてある。

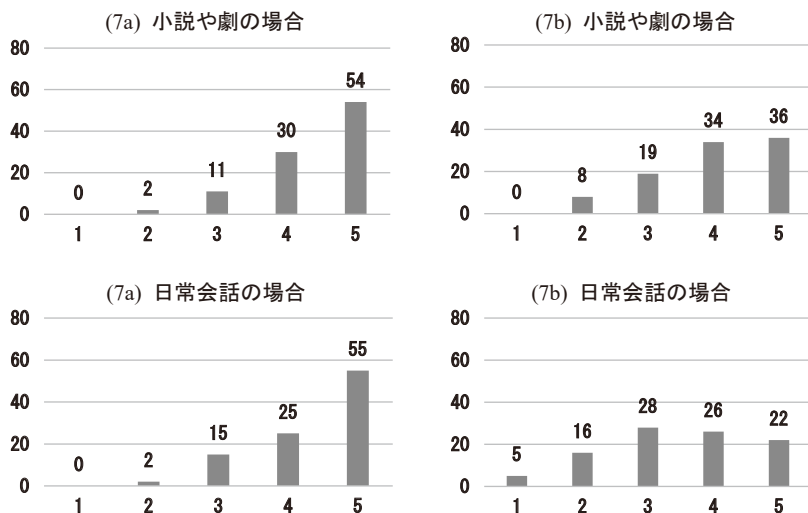


図 16 発話 (7a, b) の自然さに関するアンケート調査の結果

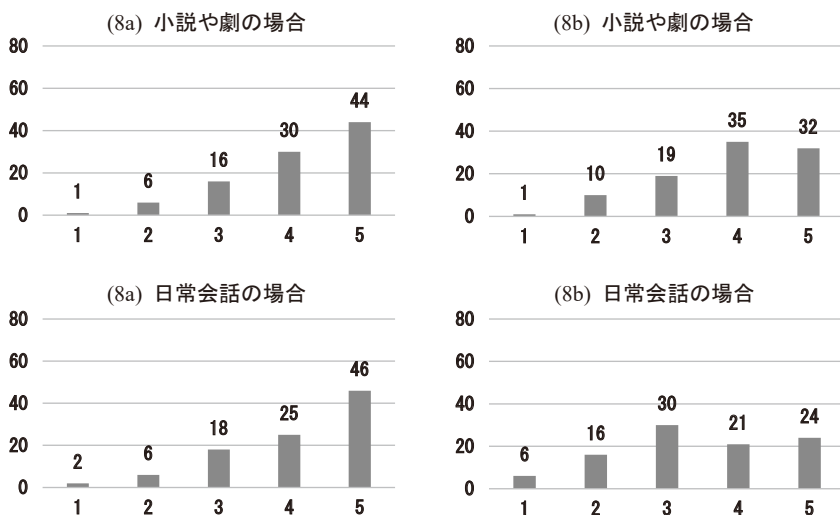


図 17 発話 (8a, b) の自然さに関するアンケート調査の結果

図 16・図 17 は、回答者の判定結果を示す 4 つの棒グラフを並べたもので、発話 (a) の結果を左列、発話 (b) の結果を右列に、そして小説や劇の場合を上段に、日常会話の場合を下段に配列してある。発話 (a) (左列) は小説や劇 (上段) でも日常会話 (下段) でも自然と判断されやすいのに対して、発話 (b) (右列) は小説や劇 (上段) なら自然と判断されやすいものの、日常会話では自然さの評価が低くなっている (発話 (7) (8) とも有意。 $p < 0.01$)。つまり (7b) の前半「5 時にこの店で会

う」や (8b) の前半「いつも笑顔でいてくれ」は、小説や劇の台詞として見聞きするならば、日常会話では「声に出して言えない」という弱い傾向がある。

なぜか？ それは (7b) の「5時にこの店で会おう」に現れている意志が、話し手の現在の意志ではなく、当時の話し手と彼との意志だから、そして (8b) の「いつも笑顔でいてくれ」に現れている願いも、話し手の現在の願いではなく、当時の彼の願いだからだろう。命題が表され態度が表されれば、それで発話が自然になるわけではない。話し手の発話現場での態度が表されなければ、日常会話では発話が浮いてしまう。

言語の現場性を示す現象は、まださらにあるのではないだろうか？

10. 口をとがらせる発話

筆者が収録・公開している一般の母語話者の発話（注8を参照）の中には、「社長の靴下」と題されたものがある（図18）。

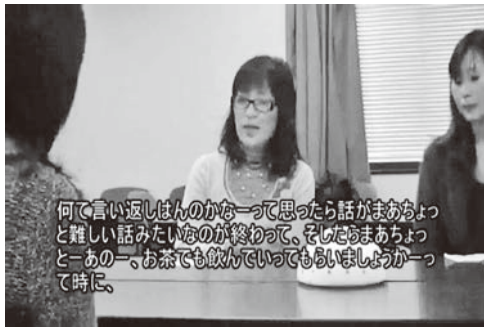


図18 「社長の靴下」の一場面

(ビデオ URL https://www.speech-data.jp/sadanobu_book/202410/)

これは話し手が勤めていた会社での目撃談である。ある日、部長のもとへ、別の会社の社長が訪ねてきたが、ズボンの片方の裾が靴下の中に入っていたという。最近流行のファッションから始まり、問題のズボンの指摘へ行き着くまでの部長と社長の対話を、女性は1人2役で再現している。(会社間の関係によるものか、女性が部長を上位者として、社長を下位者として再現していることに注意されたい。) なお、女性は「ズボンの中に靴下が入っている」と、内と外を言い間違えているが、女性本人も周囲の聞き手たちも気づいているようには見えない。

この40秒足らずの再現対話の中には、「いや」で始まる発話が4つある ((9a-d))。

- (9) a. [部長役で] いやいやいや、近頃一、街で一、なんか服とかなんか流行ってる一なんかファッションとか、あんの？
b. [社長役で] いやーはやー私、ファッションなんかに、疎いんですわー

- c. [社長役で] いやーそれはー
- d. [社長役で] いやいやいや私そんなー

これらの冒頭「い」が発せられる部分の動画（音声なし）を各々切り取って並べ（図 19）、37人の大学生にくり返し再生して呈示し、「口の横幅が最も広い動画」を判断してもらったところ、34人が左端の動画を選んだ。



図 19 口の横幅を比較させる実験に用いた動画（左から (9a), (9b), (9c), (9d) の冒頭部）
（ビデオ URL https://www.speech-data.jp/sadanobu_book/202410/）

これは上位者（部長）から下位者（社長）への発話（9a）から切り取ったものである。残りの3発話は、下位者（社長）から上位者（部長）への発話である。これらが「口の横幅はさほど広くない」と判断されたのは、話し手の口がとがっているからだろう。日本語には「口をとがらせてしゃべる」という慣用句があり、これは子供っぽい不平不満の発話を意味するが、実際にはそれ以外に、大人が恐縮してしゃべる際にも、口がとがることがある（定延・林 2016, 朱・定延 2016）。

では、口をとがらせて話し、恐縮を示すという日本語の物言いは、ソシュールやイエームスレウの「切り分け」型の記号観（図 20・図 21）で捉えられるだろうか。

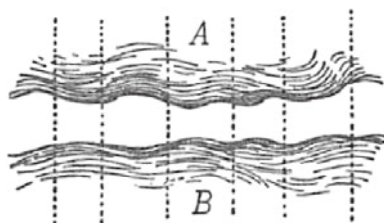


図 20 ソシュールの「切り分け」型記号観
（Saussure 1916, 訳 p. 158）

<i>træ</i> 木, 木材	<i>Baum</i> 木	<i>arbre</i> 木
	<i>Holz</i> 木材	<i>bois</i> 木材, 森
<i>skov</i> 森	<i>Wald</i> 森	<i>forêt</i> 森
(デンマーク語)	(ドイツ語)	(フランス語)

図21 イェルムスレウの意味面の「切り分け」例
(Hjelmslev 1943, 訳 p. 66)

恐縮という、他の言語社会に見られない態度は、日本語社会の話者たちが長い年月をかけて「作り出した」ものであって、与えられたものから「切り分けた」ものではないだろう。それはたとえば小説を書くことが「作り出す」ことであって、文字列の無数の組み合わせから一つを「切り出す」のでないのと同じである。

口をとがらせるという発音形式も、やはり「作り出された」ものだろう。それはたとえばムーンウォークという比較的最近現れた舞踏形式を、昔から与えられていたが「切り出されていなかった」と考えてもリアルさに欠けるのと同じことである。盆栽や割り箸を「デンマーク語社会などにも昔から与えられていたが、切り出されていなかった」と考えることに根拠がない以上、「切り分け以前に与えられるものは各言語社会で共通」という図21に見られる前提も、妥当とは言えないだろう。

11. おわりに

以上、言語学、音声科学、会話研究のいずれでもカバーされていない空白部分について、筆者の考察を一部紹介した。空白部分のさらに奥深くへ進んで、音声や会話の研究者を呼び込む基本的なプラットフォームを作りたいというのが筆者の願望である。そのためには、言語学を取り巻く障壁(図22参照)を自覚的に検証し、それらを取り除く必要があれば臆せず取り除いていくべきではないか。

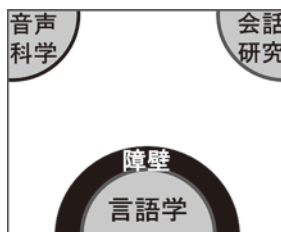


図22 話しことば研究の現状と障壁
(言語学・音声科学・会話研究のカバー領域を灰色で示す)

ここでは具体的な検証対象として、伝達型コミュニケーション観(コミュニケーションとは情報の伝え合いだという考え)、唯文主義(談話とは文の集まりだとい

う考え), 脱現場的言語観 (言語は本質的に脱現場的なものだという考え), 切り分け型記号観 (記号は意味も音韻形式も切り分けられたものだという考え) の4つを取り上げた。このような形で我々が新しい領域に踏み込んでいき, 言語研究がより豊かになることを願っている。

謝辞

講演の際にお世話になった開催校 (国際基督教大学) の方々ならびに本学会の委員の方々にお礼申し上げます。スライドを準備しながら当日割愛した部分 (第8節の一部と第9節) は, 編集委員長の了承を得て本稿に盛り込んである。その他の部分は, 調査と分析を改善した箇所はあるが基本的に講演と同じものである。本稿は, 日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究 (S) (課題番号: 20H05630, 研究代表者: 定延利之) の成果の一部を含んでいる。

参考文献

- DeLancey, Scott (1981) An interpretation of split ergativity and related patterns. *Language* 57(3): 626–657.
- 橋本進吉 (1934) 『国語法要説』 東京: 明治書院。
- Hjelmslev, Louis (1943) *Omkring sprogteoriens grundlæggelse*. Copenhagen: Akademisk Forlag. [ルイ・イエームスレウ (著), 竹内孝次 (訳) 『言語理論の確立をめぐる』 東京: 岩波書店, 1985]
- 北村光二 (1988) 「コミュニケーションとは何か?」『季刊人類学』 19(1): 40–49.
- 木村大治 (1997) 「情報・規則性・コミュニケーション—シャノンとベイトソンの対比を手がかりに」谷泰 (編) 『コミュニケーションの自然誌』 31–60. 東京: 新曜社。
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 東京: 岩波書店。
- 文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説 国語編」 <http://www.fuku-c.ed.jp/center/contents/kaisetsu/kokugo.pdf> [2024年10月アクセス].
- 文部省 (1999) 『小学校学習指導要領解説 国語編』 東京: 東洋館出版社。
- Sadanobu, Toshiyuki (2013) Structural reversal between written and spoken languages in Japanese. *Studia Universitatis Babeş-Bolyai Philologia* 58(1): 21–33.
- 定延利之 (2014) 「話し言葉が好む複雑な構造: きもち欠乏症を中心に」石黒圭・橋本行洋 (編) 『話し言葉と書き言葉の接点』 13–36. 東京: ひつじ書房。
- 定延利之 (2016) 『コミュニケーションへの言語的接近』 東京: ひつじ書房。
- Sadanobu, Toshiyuki (2018) The “my funny talk” corpus and speaking style variation in Japanese. In: David G. Hebert (ed.) *International Perspectives on Translation, Education and Innovation in Japanese and Korean Societies*, 133–147. Cham: Springer International Publishing.
- 定延利之 (編) (2018) 『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』 東京: ひつじ書房。
- 定延利之 (2020) 『コミュニケーションと言語におけるキャラ』 東京: 三省堂。
- 定延利之・林良子 (2016) 「コミュニケーションからみた「剰余」の声: 日本語の慣用句「口をとがらせる」「口をゆがめる」とその周辺」『音声研究』 20(2): 79–90.
- 齋藤孝 (2001) 『声に出して読みたい日本語』 東京: 草思社。
- Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de linguistique generale*. Edited by Charles Bally and Albert Sechehaye. Paris: Payot, [フェルディナン・ド・ソシュール (著), 小林英夫 (訳) 『一般言語学講義』 東京: 岩波書店, 改版 1972]
- 朱春羅・定延利之 (2016) 「調音動態から見た「剰余」の声: 日本語の慣用句「口をとがらせる」「口をゆがめる」とその周辺」『音声研究』 20(2): 91–101.
- 山鳥重 (1985) 『神経心理学入門』 東京: 医学書院。

執筆者連絡先：

e-mail: sadanobu.toshiyuki.3x@kyoto-u.ac.jp

[受付日 2024年10月19日

最終原稿受理日 2024年10月22日]

Abstract

Towards a More Inclusive Linguistics

TOSHIYUKI SADANOBU

Kyoto University

A significant gap exists in spoken language that has not been addressed by linguistics, speech science, or conversation studies. This study highlights this aspect by examining nine phenomena in modern Japanese. Furthermore, through the author's contemporary native language research on these phenomena, I have analyzed four assumptions regarded as self-evident in current linguistics. These assumptions are: the transmissive view of communication (i.e., the idea that communication is a mutual transmission of information), sententialism (i.e., the idea that discourse is made up of sentences), the displaced view of language (i.e., the idea that language is essentially separated from the situation where it is uttered), and the carved-out symbol view (i.e., the idea that symbols are independent in both meaning and phonological form). We contend that, in order to build a foundation for willing researchers interested in speech and conversation into the void, linguists should consciously examine whether these assumptions are unjustified and hindering research. If so, they should be promptly removed.